二四考

乾

道をたづぬる時は、いづくよりいるとも
重きをもて清き足掛みちをさだめて
思ふ時は目にみゆるもの也。求めて
得る事あらや。又我かしこに立の道
小幡川紙漉こそ加賀の国金澤也
流れしものならず、いふにあるしひとり也
この紙の推しるしなく奈良にも集
芭蕉翁の風雅に遊ぶ 北枝叟の門に

起ゐて年を盛しかとしの故あるを
守るを在家に傳ふ幸にいふ今嬰に至て残
譲しめ斧予常にいふ愛ておもきを足るに
猿らせ盛に勝を示せ藏の書に目して志ても
うねうでひ尽も深くきわめし人のうく
あぬめ得ん絶るたへ設手懸さらは甲斐
志ぶの彦ねき金言なれしも神まり晴し
きるゝに限なふ形をて随侭懐の旅に

隠しくそ又美之備の庫中にて秘し免
おくゝ事ここに子二十年ぶらに梓を者りぬ
其あらし人意今年十二歳の佝備
見ぬ昔せ世年去も者を盛かも歎
衛耳順より西を求て勝ハ敢て玉志
ぬきも此志しの緑を異乃を来に尖て人
意口れしく本物に何てし方に無統き
耗のよふを豊とし又坤此一中に卯事

解き給ふ幼僧庵の記する元治第二の春
いつかまつ色やこの那須の野辺の
らひ手に入る詩を合きるかの
京より将軍の口授とて
すまの家許まるる句作る人間才一の
芝山那色里 牧そう塔を初歩よりの人
芝ひぬる歩まる歩 武州熊谷の
ふるふるまる 標号芝山と出
さる翁三四歩と改其名一戒言るしる
絵手 梅本よの日さ作るあこ書
天保七年子春
つゆり庵
鶴里本

小姑考

一風雅の風を物するに野生地雅を西一き地
風を風諫の風し風諫を風のいきを人ある見る
心きめるを風諫我もてする時を見ると
志をまふに其要を先まをて諫ーはき
事を已り身よりして動の要をあらかじめ和と
一家を諫をもて諫を又一家をを諫我もいきを
云ふをもて諫を君我ゆるをする良策を
已りを相成見を遠るを動いるをものを

風流の如く貴人に入て歌を詠ずるを
其好むまゝの歌引出し此風流此
ゆゑを書るを以て及ぶ人と云べし
爰に別に如此の風雅を人に生ずる事
勝人の技芸に勝れたる人の
来り学ぶに近付んとすれども
勝れたる人に成ずるに成ずるに
風流し風体を異にするを今俗語に
風流好みかたきを種々中の風流

来るをも知らずして和歌を詠ずるを
風雅の風流ゆゑ爰に今俳諧を中体
風流と云へるを人に勝れたるを
いふ爰に異体を好みて其好む所
者こそ風流者といへるを皆〳〵かたり
ゆるゆる人に勝れたるはゆゑなり
俗世間といふ爰をもて芭蕉翁
業にあるを念仏の行者也高人なり
西行を仏を去や賢を公家に中町を安世

皆〳〵其行ふ所は古人さく所あるまきて
伝説の以て為き用あるべきことを管理す
伝説部類人と為すべからく物ふかし異なる
所我為まもる風流の為ふ所ものし人の海を志す
古乃人也志我思ふを以て市朝千有るとも大隠
士といふべしおの〳〵勤一時すれども分ふ所は
風流の罪人と云べし人を為を為むまの為
斉ふるものへ引き出やしもすれは風流ふ所ふる
ものあり拙者高ぶを為ふ以業の為ふ

拙ふ時ものつゝ風雅の人と云べし
御南代御吉例〳〵花の下拵て恵寿院と
いふもれし大寺人竜の和尚を起ひ佛を志る伝説
み老ひ武家町家の伝説を起ふ事を為しと為
ふまは皆為ふるふ事起ふ尤嘆し古今伝説
為みて考へべし

古今伝説奇

笛の音は書おもしろ〳〵ゆゑ
為ものけるとは以みせあるけん

はかりなくてうるほしなんといふやうなる風しかと
特云のみは発句をて連歌のかゝりなるはなき
事なれとも風しは脇はおもしろしみ連歌の
発句をは俳諧の発句もみなしかるへしとも
俳諧の連歌也一巻乃うち皆連歌より始
俗称は句一二句はかりはみなしき連歌とさしと
いふへきなる風しは俗云平語をもて連歌の
おし書ふきは発句はおもしろき也一巻の内
いつこをみても連歌の意ふしは雑なるを俗諧

みもみ巻し

附句

一附句は先発句をとりて吟味して其意を
俗語にうつして後に余情を発句にかへ
附る時は発句の風情を一段いきとゝ
なるなり発句のあかるきすなはちまこと
おもしろしかるを又ツ発の法七名八雅乃附句ふと
いふのまこと也其支考ら云一句の外は秘
みても附へ是をもてからんと云事なくさる初心の

上し句を宵る句此外ふかく共に句を考り
あるべしかし

梅うめの花とみるの性とみるの山路の船

とりの句此姿情をとゝのへるの時は山路の船山の
きゝ立ゝる風情梅のみかをの中のうぐいすの声
姿書此句家ふるゝ句とゝまかゝふし
を風情あゝ雑るの新しく主近此片山里雪
白此中乃ゝ色の句をしを云外の意を偏に
あるもしぬ物は所〳〵に雑るの時まんをし

新ゝ色の意を偏ゝしぬ物も発句一〳〵日
姿情を偏しゝ少も此不おゐてまみと一句
附べき句をし外の句附るゝ書此句乃外に
附方くし此外附句家〳〵ゝゝ色し附人をゝ
命て物に句を化ゝ色し一句のおもし詠も
家句に附さ物をゝ附まゝ歌き句みゝ考る
色〳〵或時

芭蕉翁ゝ人の写を附原十二通を
とゝ句を玉ゝしゝ人此遍をゝ人をいと花

て附き捨て附所きを要家に化して
る白み高白なる白内なるひもひしく一白
一白といふもお郡し
一脇きに拭ふきゆへ新奇白の余情を力一杯
云ひ叶へ奇白を助るに大に傷ましまあ
拭きに附のを極ふて来ぬ中ふ勢人と
する時きに一意のうふ冗一もつきふし
一冗三ふ打越ある所経たきに附かし分論
特白の惜し冗三重けるく一化きに大に系

ふく仕きふし附落ふきみきに附ふく
附所ふに書に系きれ意の冗三みて附ふ
豊白を場あり時分附ふ風情を持初白風情を
あみいふ如く極に書に地乃附ふ風情を逆へ
附ふきふに冗三に起ふ書に拭引ふ海書き
ふきふに人来ふ引ふくふ時に冗白ふく井所に
附意しふみふてきに三白も四白に白みを井所へ
書ふも出書と変みて書ふを附ふきふし
書みを附ふきふに拭れつきふく書し附て

家事結をすまし氏子を遣はすべ
しつけをし
是を時節の祭し雑るの所へ吟を
出月のかつをを喜ばれを
又をて田舞の人は
越もしくのうれ舞白へもらしたし
又四しし是あるをを
昌を四しし一白の他を
才一のるをを

一第三 て留 らん留 もふし留ふとおたく留る
るを只生の白を色四をん予色あるたくの
おくをあをはねとして何しをふを
て留をする時を四白月へかををおのつう四自の
つき出るをくをさん留色しををるつきをを子
坊人を也を名留も四しきし 時を 山橋
飛月ふくをふ時を四白目を吟山を生をし 自
も留し留 別字も皆おの野をし いつれあて四白
月ををを吟山を生をはををしきし

梅の香を風の草履穿くと
あさとれば芽柱さらば咲みきそ
陣売まるさまらめ咲やそよ
春れ来てそれあるふの梅

山彦の名留むこ字みるを五字れ仮名なて留る
教あるとしふ宮二字五字の仮名なとる
翌ひいるの奥係ふやつ四字を詠を
不明ようん や

櫻桜山家乃体を木芽俳
とりの弟三を仮名もを四字れ五字留し
只はるを言論を仮名はるを桜人の歌ふ
あるあ〳〵きこの出附もくる只翌りの深くやそよ
四句目〳〵かるよすを悪し
一四句目桜お郭しきふる弟三を仮ふをく附〳〵
するこ無ふをしきふるをきく桜と弟越をかる
他をと知を悪し弟三の心屋をもて心はても
生の句を屋ふ者すを悪き也其句の限や

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一月[illegible]

かき[illegible]

月[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十一月ばかりに表裏ともに淡色なる白牡丹
四、五枝ばかりにて葉のかたちなどのはなやかに
すこしかすかに見えて花さきつゞけたる白牡丹
あるかぎりをいとまなくさきつゞけたる花の白
きものの白きなどもおなじく淡くはなやかにうつくし
花さきのこりたるもいとをかしき事のこと 淡紅
色にてさきたる（しの助字をはぶきてつけ
たる白牡丹ふたゝびの一枝に花あるもの時の
助字のはぶきたるし助字をはぶきたる趣美よ

とゝのゝしくもとゝのゝしくみ助字をはぶきたる事
きのこゝろをなほ淡白にはぶきたる
葉牡丹 黒ずみきる枝下ばかりに葉のみ
十、のまきたるやうなる牡丹 枯し
白牡丹やうなるにて花ばかりにても黒くて
くしかたちなる花の白きをまきたるもの
白牡丹の高人乃黒こゝろをしる葉をまきたる侍
葉は葉のまきたるさまなる葉の花も淡くはかなく
直例の葉の白みてまきたるはやく白牡丹の

さいふて其中へもの字を残りて結ひ留るたぐひを
新のみく助字のみならぬものし正しき花鳥にても
附きて能者三人なるとも一句の意をなくらし
ぬるにてこそいみしき他

伏見にての古手風の月
待もあらかしもとふ夕月

又於此字をは助字にきひまりの字を残助字に
清の字なる郡しなとり月をは助字に志てする句
花けり書くなりいと面白し　結句此月さく歟

助字ありとは長句の月　於助字ありて月をとかく大
かくて助字にのみ薄りをつけたる人のみなる
俳言に附る不仮託なる意し　附属に撰ハされ
は助字此月をは一つをも出さぬなれハ正しき月をも
四季をは意を届しても附きたる句　又季なる句に
不用の月あり何しは満ちしきるまて季一つにて此
夜こそいふ意し又なく引よりて出てしめぬる月をとるより
助字なく月をはとは不用といふ意し意角なり
句中不用の物あらはとも去来にてもまぬかるへし

らて蟬の声

向ふに見ゆる

力此句をつきし中のる子
さゝ波や三井の末寺の語とりみ
るかむくのみ寺の鐘れ山し
寫く句中を附けは深く感し本句古附に時ハ
うるわ越の末寺もせく末寺代事に其意く句ふ
附る時ハ元に飛り松梅の言本也又八月今夜
主色し其中にも月出其中深の姿情調ひ

なる意し此夕の景の君寄せして情の月なり
さる二集の一月待ちまち成る風情なり

乙 ゆけるなり 此句は此月夏き
とふやと思けなり此る此外句中の姿よして
今一句風情ともち句まて色きみ当して言葉の附
ふまくし寫す本意て月を出し句なり又仙此
二の意みて画例月なりて意其ていきまきて
とも出さむ叶もあれ月を附くすして右此風情
調ひかくきを定て出し申しは趣を得台月

いへとも風情力ありと云べし
一茎と咲くも春も好み来る梅も桜とても
すくなき故只正花として其名の景は四季の色に
とりわけて定めおくべし無下に多き時は句に
其季の内に此不然らずは何ず書しかれども
月の句一句多く成るを書と取出て打払て
出侍る縁を書してさえて知るべし又句数と
とこ句四句も続きておもしとこ三四句もつきて
句になきも其季の景をはなれ多き句の言をとへし

又いふして句にまかす続手は其季に成し
其季のみ続くきをは句に非季にし句にの句に
其前を附其季の句へ句に秋附するなしとも
らまして一句まで挟て句に嫁りて其季へ心をき
季きもの季りぬへし自他を吟味して附べき也

環外之附

行き行く此小鳥一羽き霊子を見て
十里まつり此餘所へに小鳴る

又

寐ぬ夜誰も寐て眠ぬ夜の比月

[illegible]て婦人[illegible]於て物

又家[illegible]ふ[illegible]と話を見[illegible]

鍛冶[illegible]いものを[illegible]て

[illegible]外[illegible]かるを[illegible]方[illegible]し[illegible]その情

[illegible]人の時節[illegible]と云ふ理中乃[illegible]

只[illegible]物[illegible]と[illegible]ふを[illegible]て

[illegible]を[illegible]一[illegible]何[illegible]事[illegible]自

[illegible]て[illegible]

物[illegible]と云極[illegible]

維[illegible]の[illegible]外[illegible]

一[illegible]辨乃自[illegible]

乃[illegible]

や[illegible]

[illegible]宜[illegible]

山中問答

蕉門西風説俳諧を手本とし、専人を世上の俗
共に迷ハしたる鳥獣の云説よりむつかしく寸
毛地を立て、家物山川の本人倫乃本性我
為神を敬為義を手本とし、貴賤を教ふ
時宜を古今に通し、易の理を考へて
流行の変を深く考へ、対を志賞大にして
ものの像を作り、ものの化を自生し、世上を和
人情を安ずる為に、雷門に移ひき

一西風俳諧の始まる家物の元業もかくの
ごとく一端を以て、世を俳諧の字を
とゝ、詩の言葉を俳の字を作り
といくるも何ぞ或は史記の異説引て
宇宙鑑のごとくよりの元もなれども
俳諧古人をしと看破する限りを論ずる
といふ元理まる野て俳諧の二字とも通ひて
拝ハ他つを對して論ずるものを神と云ふ
弟子ひき元理ハ二種あり

一俳諧の道理を解する人を俳諧を教ゆる師匠とす
理屈を言ふ人を特きく世に上るまでの俗
の子にて俳諧とかかるこれ所以を言ふに蕉翁
西風の虚実を志深き人を高うつの弟し
と云ふべき

一虚実を文章有無知辨あり仁義禮智有
虚に実あるとみるとこれなるとふ虚に
実あるものを世に婦人にしてみるべし
さくらさきしかに西風俳諧の人とまるとて省

笑ひ草

私曰虚に虚なるものを儒に義
義を主とする也

一古くより詩にいひ歌にそれ外に赤に
中に仏教に世に常俳諧の文字に連ひて
和歌に対し半に名の字に隅を辨ずる程他方語
の理俗に義に狂言語にのみ是半に
人もて愚し是ほどきるし

一俗にて道学の系にて学問技術に愚に

[illegible]

一俳諧は其時代の俗語を用ひて俗語を用ひ平話を用ひ平話を用ひ俗語を用ひ

一世人俳諧を[illegible]して俳諧の半ばを知らざる故句の巧拙を定めんとなす[illegible]

正しきみを席よりの[illegible]

一初学の人初心の[illegible]

[illegible]

一面八句五四打手曲節の地に配するを歌句の[illegible]

義句の[illegible]大将の位[illegible]して[illegible]

句を士卒に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

みつる趣なるをおもはるす第三に或ハ
半節半曲あり沖縄白及ハすん胴三丈九
尺情あり　て留に沖の名者と言すし
て留弦掛きぬきは沖留よりて巻きてと
あるに

一俗謡百新に四打八面よりて表裏の白なり
影仰みてに三味に二丈九尺表に整不と知る也し初形ハ
地の白と黒うみつる表に情に云を呼すに巻
る也し表に白あと黒に仰ける也しこの形ハ

至て表地半節あり初形に神法をおし
解るに云ふ表に礼の用ひと云るの如し
三の形に俗謡の起ひ不ふ黒ら表やあるる
白弦張る也おかつみを巻す也しに神も
知て礼を見すに巻に西風に姿に白
つる也しし
名称の形に一尺の尾あきは黒に尾し
きをぬきすす也し白ひのを峯白なるるて八
に表の人と行きぬるに稽也俗謡に沖の

老ひみしらず侍をもんて交るる○あり俳句
一世我風しさせんとくるを句手平世其意を
調へとくるを案一変の事化を第一として侍らん
新しみをんかくしし俳句の古きをとるをけき
句代新らしきを俳諧の第一とす
一句みな風雅とをるを我為をるをすべし　さび
志第一　細く　志第一　しきをるを風雅なるの
ふのみをまは或を平語乃句をるをよ
為或を世界或を野鄙をんを俳しをみを理

ゆ為を俳諧を弘の本ををるをそをおぬ
をを大切をるをん
俳諧を遠物をるをんを風雅をおをを物をのみして徒ををしあを
をを事を世を見おしを玉ひき
山中温泉みをを宿の物語玉をを
ををををを書ををを見侍る

元禄三年

金城　小枝誌

蕉門誹諧 随門記

武洛文通之中或面會之始席上之談話任聞記之

一 ある句の位人柄をしらんと思はゞ其角嵐雪が人柄ニ
寄合ふせつニ句案あるべし

〻徳様ニ銀かりつけを打砕き
身ぬきし太刀の名かくと見えし

是等ハ降ニ似せて置きとも太刀の名かくし哉
見えし中ニ何かなる此銀をかりけ抜打ちしきと
申まじく候く寫きまくるゝ之銀玉錢をとらざる様も
庶人ニての風情ニて候身細き太刀夏人かく

[illegible]

尼[illegible]

月影[illegible]

[illegible]

[illegible]

羅[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

書の世人手の長くあるべし
長き者白髪人を對して一白髮志有て附
きつるもの那るまつ
一想しまた古人の云ふ所の風景ふも情みも
今みまつりて仕まいん降るくきるの秋
古人の中あるまくを初とし かえて雪や詩成
俗情をしまくらんきるのかあるし又俗
詩の詩もはまつ古人の云ふまつりて二月を色
まくはまつきあるべい

はるの時きて嬢のすきみを惜まれし
ふくまつそ人を馬しかきる
長よまつ事
妻喰し孫と思くとあまきのあ 野水
み遥見人家花有入
不論貴賤與親疎
長よまつ 梅の香や色倉の家記のる
色倉きを見あけ夢記くと多陪居し
きまる和白巢方一生俗し

又西行上人の旅をは夢まのしと
[illegible]

杜陵[illegible]海苔[illegible]は光の夢もとて　翁

西行の看経のこゝろ[illegible]芭蕉[illegible]
[illegible]海苔[illegible]法[illegible]也
光[illegible]白中[illegible]眠し
又定家卿の義し世[illegible]は思[illegible]
[illegible]戦人の
[illegible]山し思[illegible]は猶[illegible]悲

淀の[illegible]
[illegible]宇治の川[illegible]芦[illegible]海苔
東坡[illegible]

玉手千人枕[illegible]戦

[illegible]人[illegible]探や橋[illegible]涼　晋子

見[illegible]橋上[illegible]吟[illegible]
翁の[illegible]病[illegible]を思[illegible]

隻[illegible]や[illegible]用[illegible]小倉也　仝

[illegible]集[illegible]
[illegible]戦人の[illegible]

君うせやまの雪の積るを見て詠める

古今和歌集に曰五月雨の空しく月の影やどす水の面に

うとゝさ絶ける又化粧ふ雲の色とゝ

白と言ひつゝ五月雨の空に伝ふ我宿の下高や

を豊のさきをひける詩に曰く雲の字を加へ

陽よ是伝る或時去来り

精の森に月うゝや明き月

うゝ伝ふを湖の白隠る蒼白を絶えて言

古今

時雨とゝ野辺とゝ山とゝ冬毎の

如くに降おくるを絶えしうの国

はとをもゝ見絶て俗謂に物思ふ

うけとゝ也ハはとゝ也すゑて和歌に詠ん人情を

俗謂に霜とゝ調弱とゝ伝る

とゝも世とゝ絶て海とゝ

とゝは生ず

すゝきとゝ時る絶の海とゝ

とゝを俗謂に伝ふとゝ時ふるとゝ時かゝ

るすあつさ袖すまし俳諧の詩歌を詠じて帰し作
切しあるやうに仕立て上れども古今集の和歌を出
りし作しし句れ混実しておる入古集を添もあしく作
作者も心なしかず削りあめの足へぬやうにして題
句れ様も作只平生の景物も情をも
思ひよりて仕立てしし事を前え思ひをみすき
ものかたき角もあらしかしすきまと俳句
てすあしみうる俳なるとて古今集に御しらべゆき
ぞとはあることも見え御すしき情を述べん 見すてもと

さまなふし俳諧はきんをとうある俳ありさまとさ
やうな色しらしみな移る如くたるみの恋をます
あとんしての色し古来の妹平子が

小鳥さへ渡らぬ方の深山かな

とあり侍るを古来評曰唐詩に

一鳥不鳴山更幽 といへる趣おのつからあると

思ふ 附句發句も平生因前古今人踊
四時遷変風景千里人情万慮一年のうちいろいろ
を思ひよそへし風景あるさまにも情を作るま

何ぬるなるなみ甲し侍る寺宮の宮かき
白き一五きをのしを神と崇敬する紀氏
るなし高宮何とられる白き白紀と御し
泪も義侍るものし古翁元禄甲戌夏又深川の
芭蕉を尋て草庵に白紀高野と呼る白き
遺意し移ふ清滝なり

清滝や波に散こむ青もみぢ　芭蕉

ちり〳〵紅葉ちれしを世に流布する因今浪花
なる病却治ひけふ浪花なる病床のうちも

只風雅のまことを今錆て素堂集に書ふ世
白き清滝の白さかるかるふる

清滝や波に散こむ青もみぢ　芭蕉

海子かるる形ま侍る義をとさちる田ましん
いるかるきるとき多侍るるて寂海
を流し侍ふみ深川みる人〳〵翁の俳諧
景を侍しる多今思ふを海き砂川をる
如く白紀形附ふて特きし甚不至て味
あるなん又或時厳て曰見るれ詩て窮すと

宣しき芭蕉の句を佛の姿にたとへたるものなれば佛
き紙面のうへにやさしきさまにかの甲斐なく
とのくまなしと書き新しき芭蕉翁の句
画を為る侍屏戸侍りて画を張附
らましかの冊子の畫中に画かれたる
王維の住誉し又韓幹の馬を画き書
つくりたる芭蕉の画讃王維の姿を
ものなり

柘榴子の句の海内に於の事

某物子に蓮見に行る雀の那
見給ふ事絶しみ弁柘榴讃み
所らはたる蕉弁柘榴に蕉と金
弁うるる事を定しと古翁の見枕し
古翁文を文考
木啄の八巴り見る蕉の松　文艸
巻を此事　文考
芭蕉旧稿巻頭　白城拾遺　試み　後巻
評き　也

應[illegible]と云[illegible]や[illegible]
大なる話曰ふ白ふ易うの椅と嘆く流れの事
中を[illegible]ふ家ゆ有[illegible]と云ふ
支考嘆曰いつもの[illegible]ユまをもてかくる岩き筋ハ
入[illegible]やく云ふ曲翁曰只家ゆの白し
正秀戯曰他者を中ゆ[illegible]美爲を之門謂武白
他ふ色き人を見ふ[illegible]曲時[illegible]北白冥口
其角刈曰詩[illegible]北つ非許六曰尤佳白也
[illegible]十ふ有ふ家川曰五文字ゆし去乗曰情

[illegible]き叢や
[illegible]多銭多き[illegible]けや[illegible]
[illegible]いふ[illegible]迎ひ[illegible]五文字除と
いつも五文字を[illegible]ふ[illegible]白武白に
寂の足えぬるを才一と思ひ付る趣て翁の白
強き白嘗弱き白を[illegible]き白も[illegible]れの他も
武寂の侍ふを其角[illegible]人[illegible]れもうら
やむ不し業[illegible]さむの見えふ[illegible]れ古翁
残せ[illegible]ふよ[illegible]ら[illegible]ふ[illegible]き一笑を[illegible]

篭き物とゝ歌き侍りけ條につゝて寂の詩ゝとと
斗覚て云評ナ此ナ亦き体は愚意の謬
覚束なし先達の書
　落ちや　白きかしら残清き命せ
と侍りし残筆満し寂寞足えしゝと事寂も
嘗て美み侍
　御萩物とも書細引て愚めさせて
　戸口て居きをいけるきる
是又萩物を取扱く常しき中にて篭き

尽し去来称美侍

　附方自他傳 他是無用不可攄千金也
硯ナ向ひす筆を持て物いゝ　自
梨栗の色唄揚ふ多ふ夕小句　場
維子ナおしゝ派く女一もま　他
加からて中此句人情なき附句自他をとらま

[illegible]
白拔奇方よりこれ伝る

又　おもうにまかせぬ尼の濱やかうらん　他

まれにまれまれにまれ　自

きりぎりす破れまあみの風の音　自

[illegible]も自他を問うにけるもし作者の自ひき

四五日をへて情あき自附て時を今一日延て

附句を常のごとし

義尾河内　松よ志ひまして　場

[illegible]

拓義のあさぼらけ　自

又

看病氏鄰　以上作かり　他

かやうの人情あき自分自附て伝方附きを人の

自分自附て表あるを思ひて自の句より

又きりぎりすあうよ自他を色し以伝方

[illegible]

義宗附て[illegible]　松の雪ちる　場

八月下旬より稗を抜き初む　他

紅葉の色足め紅染の哉　他

ものゝ他の白より他は白を白くなる時は

足て赤くなる人多し三白ともよく足えて

他と初る色し人倫人情のまぶまし

とゝし　赤白他と弁て

又白ゝまゝ紅あり　他ノ

ゝゝ詩ゝぬゝの中も足て赤ゝ人多ゝ

とゝ初る色し

又聖霊おゝ多紅きを絞き

ゝゝ多世ひとゝ足て赤ゝ人は白の白とゝ

白むひゝいつは外詩ゝ多

何まゝし紅を鞋や絡の行ゝ　自

今年きゝ　詩外のまゝ　自

足とかし橋ゝは如秀達　他

ゝ屋ゝゝ白の白ゝ詩ゝる時ゝ年白は

白ゝ人ゝゝゝまゝ物ゝまゝ学せゝ者し

新のちらしかに人をかはる見し是まで句より
他く構る句法あることし考え見し此か附
てきたすし

葉は赤い也孫まで法まことふき　自

一ち素いまそ日井の御垣ある　他

古あまき松まるともをさくり起る　伊ヨヒ

又

あかろすしくと尾根萱の藍　他

うゆしく自此句て他の句被句いきるもとし

とくに手触く居しぬゆくしる土たむ考手も難し
かくきこよ此し尤二句の冒よくし句子乃居して句他
す飛し此外皆すまふし

むとの法くまで年咲え糠也ひ　他

志ある居干　鳥ふ肩干　他

ところしせる袖子蓮此下句を見　伊ヨヒ

新の如く他此句に他此句句ひきる時まる又他の
あしらひまと須く也他志句三句いくゆくて
赤まても何からあふ祇もくるし　かく作尤三句

[illegible]

又

深きぬをと思ひのまゝ愛あり君　自

かゝるみ自の白髪のまゝ降てもとし[illegible]なる方あり

鶴寛一二[illegible]結とはゝそひて　他

[illegible]なる自て[illegible]降る　他ノマヽニモ

何の為[illegible]かあと思まて　自

[illegible]他の白て他れ自[illegible]ら[illegible]の白附

[illegible]ひの白[illegible]れと[illegible]

自れ白を白[illegible]し[illegible]三白かゝ

[illegible]地[illegible]山[illegible]の自むひていまゝ

[illegible]に[illegible]れすり白　他

[illegible]とめ髪も[illegible]れ付　他ノマヽニモ

何[illegible]る[illegible]ゆ　自

[illegible]の如く[illegible]れ白[illegible]人[illegible]

自を[illegible]し[illegible]方あり　自モ他ニモ

[illegible]の経[illegible]れて

[illegible]ち[illegible]ゆ　時節

水上に識悔しとぬまもなる　他

かへりよ自れ自らも降るくさきさもさもさ

ぬきもの降る他の白を降るとん降色し

月きに重ね水れさ白しまの於　自

名あるまれもやぬ雲降き　自

如れまして逃ひるとぬふ　他

かへりよ降きに切あれ白ちえうみの白降る

時きに降人も白きに降色し花ふは三白

あれ中ちるるいうやくて白他して素

軒をぬるるの降ける

海ぶるきに赤のけと夕白かるかな　自

おるれしきます人ふのるる　自

煙るのぶるる種に白素きえの操　他

つやるて恵とるるも松ふよおぬ人ふはやる

自の白よして他れ白を白ふきて降色し

山外降赤しとふふ人を人情

ある降色るるふきとふ白の降方し

白他ぬ時や策白を人情の後

7800

[illegible]埋の所[illegible]ひ時節
時々天相[illegible]足合所為し
所さむ[illegible]を知[illegible]のたゝるとし
所[illegible]も[illegible]無白を[illegible]未[illegible]
為と作[illegible]

右自他の作を三[illegible]の工夫を[illegible]蕉翁年
足きゝ[illegible]の一法也任初より他足を[illegible]執心の
人よ[illegible]為き多くも秘[illegible]し

元禄五年春　芭蕉庵小枝刻